

# Access

第 45号

2018年(平成30年)9月3日

## 異文化・異質から学ぶ

黒部市帰国児童生徒教育研究会 会長 寶田 順一  
(黒部市立中央小学校 校長)

27年前、私はオレゴンのホームステイ先のホストマザーから、「米国の歴史」について教わった。彼女の話の中で「この国が偉大になれたのは、2度の市民戦争(独立戦争と南北戦争)の経験と世界中からやってきた移民が持ち込んだ多くの異文化のよいところを取り入れた(融合させた)ことにある」という説明が印象に残った。彼女の意見もあり、私はこれまで随分と意識的に異文化と接しようとしてきた。最初の頃は、社会科の授業に生かそうと始めたことであったが、我が家の子どもたちにもよい影響を与えるだろうと、機会があれば家族ぐるみで異文化体験から多くのことを学ぼうと考えた。

だから、24年前に魚津市に来ていたモルモン教徒を自宅に招いて聞いた教義の話や飛行機内で隣に座ったインド人夫妻にカースト制度について尋ねたこと、カタール空港で6時間の待ち時間にイスラム教の人たちの熱心なお祈りの様子を見ることができたことも、それぞれにかなり違和感をもったものの、文化の違いを楽しめ、貴重な体験ができたと思えた。

さて、そんな我が家の異文化体験の一つとして今も記憶に残るのが、魚津市の友人宅のホームパーティーで出会ったアフリカ人(コンゴ民主共和国)と日本人の両親をもつチコちゃん(当時3歳)のことである。私は父親がアフリカ人のミュージシャン、母親が人形作家というかなりレアな職業であることに興味をもち、感心しながら両親の話に聞き入った。わずか1日だけのことだったが、その思い出は彼女の屈託のない笑顔とともに私の記憶の片隅にしばらくは消

えずに残っていた。

その後、彼女が幼稚園や小学校に入り、自分の異質な部分に悩んでいると聞かされた時は、とても悲しい気持ちになった。しかも、周囲の子どもたちの好奇の目に深く心を痛め、結局は彼女が県外の小学校に転校したということもあって、余計に深く私の心に刻まれることとなった。

出会いから25年が経ち、今年の5月に私は黒部名水マラソンの前日イベントで彼女を見ることとなった。なんと彼女はプロ歌手「CHIKO」として地元で凱旋してきたのである。アフリカ系音楽独特の哀調に満ちた歌声とこれまでの自身が抱えていたもやもや感を払拭したような伸びやかな歌い方をするすばらしい歌手として私の目の前に登場したのである。

私はこれまで2度、彼女のライブに行ってきたのだが、彼女の歌は、本当に感動的である。中でも日本人歌手のカバー曲は、本家本元よりずっと心に響くものがある。ユーミンの「ひこうき雲」や中島みゆきの「糸」などは聞いていて涙が出そうなほど、つい感情移入してしまうのだ。

彼女の歌を聴きながら、私は彼女がこれほどまで成長できた背景を考えてみた。彼女が周りの人と違うことに悩んだことで自分の異質性を自覚しつつも、その異質性を否定せず、むしろ日本とコンゴ両方の異質なものをうまく融合させた結果がここまでの成長につながったのではないかと思う。それは、まさに冒頭で取り上げた米国が異文化を融合させて成功したことに匹敵すると思うのである。

## 「帰国児童生徒へのよりよい支援を目指して」

東部教育事務所 指導主事 團 千加子 先生

日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は年々増加の傾向にあり、平成 28 年度全国では、34,335 人であった。また、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数も同様の傾向にあり、昨年度は 9,612 人であった。両者を合わせると 43,947 人となり、平成 28 年度調査では、平成 3 年度の調査以降、初めて 4 万人を越えた。

全国と同様、増加傾向にある黒部市の帰国児童生徒等に対する支援のポイントを以下に述べる。



### 1 支援のポイント

#### ① 「実態を的確に把握する」

対象児童生徒が、どの程度日本語の読み書きができるかを見極めることが大切である。読み書きが十分にできない場合、就学の場について丁寧に考えることになる。教育委員会と学校、そして、児童生徒本人・保護者は密に連絡を取り合っていく。また、日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒の場合は、「対話型アセスメント (DLA)」によって、児童生徒の日本語能力を明らかにして現在の実態を把握する。DLAは、個別の指導計画の作成に有効である。

#### ② 「指導計画を立てる」

別教室等において日本語能力に応じた特別の指導を行う場合は、「特別の教育課程」を編成して指導を行う。「特別の教育課程」を編成した場合は、設置者に報告することが義務づけられている。

在籍学級で日本語の能力に配慮した指導を行う場合は、「個別の指導計画」を作成して指導を行う。

日本語指導が必要な児童生徒には、一人一人の状況が違ふことから、特別支援教育の視点を取り入れて、一人一人の学びの足跡をしっかりと残り、効果的な指導につなげていくことが大切である。

#### ③ 「進路の見通しをもって支援していく」

日本の教育制度を保護者が十分に理解していない事例が多いことから、指導に当たる教員は、進路に関する情報提供に努める。本人の気持ちを確かめ、本人が自らの進路を選択していけるように進めたい。

### 2 富山市の取組

●日本語指導を必要としている子供の数が90名を越える富山市では市内4小学校、1中学校に日本語指導教室を開級し、日本語指導の必要な児童生徒を積極的にそれらの学校に就学するよう進めている。昨年度まで2校だったが、今年度から5校で対応している。正規教員が日本語指導教室を担当し、「通級指導教室」として運営されている。

●とやま国際交流センターでは、外国人児童生徒対象の日本語教室を行っている。中国語、韓国語、ポルトガル語、英語、フランス語に対応できる。児童生徒の状況が様々であることから、1対1で対応している。

### 3 参考資料について



- ・「外国人児童生徒教育の手引き No.20」（平成 27 年 3 月発行）
- ・「外国人児童生徒教育の手引き No.23」（平成 29 年 3 月発行）
- ・「高等学校等就学支援金」制度等
- ・「外国籍の人のためのとやまの高校進学ガイド」 ・ 「外国人住民向け保育・教育情報ガイドブック」





# サマースクール 2018



8月1日にサマースクールを開催しました。午前中には、かまぼこの絵付け体験、生地の清氷めぐり、黒部総合公園でザリガニ釣りや水遊びをしました。午後からはYKKセンターパークでクイズラリーを楽しみました。サマースクールは毎年、同じ時期に行っています。



かまぼこをつくる時、ふくろからしぼり出すのがとてもむずかしかったです。でも、さいごには、かまぼこのかたがきれいにしあがったのでうれしかったです。



かまぼここうじょうで、たいのかたちをしたかまぼこにいろをぬりました。とてもたのしかったです。



わたしがいちばんたのしかったことは、YKK のファスナーやまどなどのクイズです。ざいりょうやいろいろなくふうがわかりました。

ザリガニをつったことがいちばんこころにのこりました。つったザリガニのおおきさは 18cm くらいでした。



## 県外研修報告



黒部市立中央小学校 栗谷 結希 先生

東京学芸大学附属大泉小学校で研修してきた「国際バカロレアの理念やPYPのよさを取り入れた教育課程開発～新教科『探究科』の実践」について研修報告されました。

### ◆国際バカロレアとは◆

国際バカロレアとは、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせることを目的とした国際的な教育プログラムです。PYPとは、(プライマリー・イヤーズ・プログラム) 3～12歳を対象として、精神と身体の両方を発達させることを重視したプログラムです。大泉小学校は教科等の教育活動を国際バカロレアの「多様な文化の理解と尊重の精神」の分野で横断し、探究を通して概念を発達させることをねらいとしています。

授業では、自分のテーマ、活用方法、実験、結果、結論、考察の順に報告していました。タブレット等のICTを上手に使いこなし、子供同士で報告し合うなど、児童の主体的な学びが行われていました。

評価は、ルーブリックを用いて形成的に行われていました。ルーブリックとは、学習到達度を示す評価基準を観点別の段階毎に表で示したものです。大泉小では、個人でタブレットを持ち、自分の発表を録画したり、作品を収めたりしています。それらを蓄積し、教師も子供も客観的に評価することができる環境が整えられていました。

## 国際理解 ちょっといい話

### 「6年間の体験入学を終えて」

毎年、現地校の夏休み期間を利用して、生地小学校へ体験入学に来るアメリカケンタッキー州に住むAさんが、今年の7月、6年生の学級にやって来ました。6年生の子供たちは、Aさんの学校やアメリカの生活について興味をもって尋ねたり、日本の学校について話をしたり、交流が進みました。英会話の時間、アルファベットの学習で、Aさんが「ぼくも問題を出したい。」と言って、“extraordinary（すばらしい）”という単語を出題しました。子供たちは、こんなに多くのアルファベットが並んだ単語があることや意味を知り、Aさんが教えてくれた“extraordinary”をうれしそうに何度も発話しました。出題したAさんも笑顔になりました。

Aさんの体験入学は今年で最後でしたが、これまで築いてきた子供たちの「つながり」は、これからもずっと続いていきます。互いを大切に、理解し合おうとする心を大切な土台にし、今後も多くの人とつながり、より広い世界で活躍して行ってほしいと思います。

(生地小学校 笠井 浩信 先生)

### 「Oさんを中心に深まったクラスの絆」

昨年度に続き、6月中旬から1か月間、アメリカから一時帰国したOさんが2学年に体験入学しました。Oさんにとって1年ぶりとなる本校での学校生活とあって、当初は緊張した面持ちでした。そこで、道徳科で「オリンピックとパラリンピックの旗」（内容項目：国際理解、国際親善）の学習を行いました。Oさんには、アメリカの日本人学校の給食やそうじの様子、普段の生活の様子等、日本と違う点を中心に発表してもらいました。子供たちはOさんの話を聞き、アメリカの文化に大いに興味をもったようです。それ以降、休み時間にOさんを誘って遊ぶ子供が増え、保護者からも「子供が学校に行くのが楽しいと話している」と連絡をいただけるようになりました。

お別れ会では、Oさんの好きな遊びやプレゼント交換をして、学級のみんなにとって楽しい会になりました。子供たちは「来年また今のメンバーでOさんと一緒に遊びたい」と口々に話しており、彼を中心に学習や学級経営を進めることで、Oさんを仲間として認め、クラス全員の結束を高めることができました。



(たかせ小学校 中村 健志 先生)

## Thank you! See you again, マリー先生

I was in elementary school when I found my first big dream: to live in Japan. In my small hometown, where none of my friends had even seen the ocean or visited another country, my dream seemed too big—almost impossible. But over time, I learned how to make it come true, which let me spend five fun, fulfilling years living in Kurobe.

While teaching English here, I met many students with the same dream: to learn another language so they could go see the world. It was an honor to be able to help them, and it made me realize I want to continue even after

I leave Kurobe. Thank you for these five wonderful years, and for helping me find a new dream.

(ALT ローラ・マリー・マエスタス先生)

